



上向台小だより

5月号

西東京市立上向台小学校

令和8年5月1日

<http://www.nishitokyo.ed.jp/e-kamimukoudai>

「背伸びのあとの、深呼吸」

副校長 佐藤 太

校庭の木々が日差しを浴びて、眩しいくらいの深緑に染まってきました。つい先日まで桜の心配をしていたのが嘘のように、季節は足早に、そして確実に「夏」への準備を始めています。

保護者の皆様、そして地域の皆様、新しい学年がスタートして怒涛のような1ヶ月が過ぎましたが、いかがお過ごしでしょうか。まずは、この慌ただしい4月を、子どもたちを支え、学校と共に歩んでくださったことに、深く感謝申し上げます。

正直に申し上げますと、副校長としてこの学校に赴任した私自身も、この1ヶ月はまさに「無我夢中」の毎日でした。朝、昇降口で子どもたちと挨拶を交わし、溢れんばかりの「通知書類」の山と格闘し、気付けば、日が暮れている……。そんな日々の中で、私を支えてくれたのは、やはり子どもたちの何気ない姿でした。

先日、休み時間にふと校庭を眺めていた時のことです。1年生の子が、自分の体よりも一回りも大きく見える6年生の背中を、一生懸命に追いかけていました。鬼ごっこをしていたのでしょうか。必死に走る1年生と、それを見守るように、時折スピードを落としてあげる6年生。そこには、言葉による教育以上に、人と人が触れ合う中で育まれる「優しさの継承」がありました。

また、授業中の教室を回っていると、4月当初はどこか緊張で肩が上がっていた子が、今では隣の友達と「ここ、どうやるんだっけ？」と自然に教え合う姿を見掛けるようになりました。「完璧にやらなきゃ」という緊張の糸が、少しずつ「仲間を頼ってもいいんだ」という信頼の絆に変わりつつある。その変化こそが、学校という場所がもつ魔法なのだと、改めて実感させられます。

しかし、5月という時期は、そうした「頑張りの反動」が出やすい時期でもあります。

大人でもそうですが、新しい環境になじもうと、1ヶ月間フル回転で走り続けてきたエンジンは、ふとした瞬間に熱を帯び、冷却が必要になります。「朝、なかなか布団から出られない」、「以前より少し言葉が荒くなっている」、「何でもないことで涙が出てしまう」……。もし、お子さんにそんな様子が見られたとしたら、それは決して「甘え」や「後退」ではありません。それだけ4月の間、その子が自分の限界まで「背伸び」をして、新しい環境にこたえようと頑張ってきた証拠なのです。

そんな時は、どうか焦らずに、一緒に大きく深呼吸をしてみてください。私たち教職員も、子どもたちの「心のブレーキ」の音を敏感に感じ取れる存在でありたいと思っています。学校は勉強を教える場所であると同時に、安心して疲れを出し、エネルギーを再充電できる場所であらねばなりません。

副校長としての私の机は、職員室の入口近くにあります。子どもたちの笑い声も聞こえますが、時にはため息や小さな衝突の音も聞こえてきます。その全てを丸ごと受け止めて、また明日から子どもたちが「今日も、学校に行ってみよう！」と、少しだけ前向きな気持ちになれるような、そんな温かい学校運営を、校長先生を筆頭に全職員で目指してまいります。

大型連休というひと区切りを迎えますが、また一歩ずつ、地に足をつけて、今月も、子どもたちの揺れ動く心に寄り添いながら、御家庭と地域の皆様と共に歩いていければ幸いです。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。